

# ホンモロコ種苗生産研究— X

## 宍道湖への人工種苗の放流について

中村幹雄・吉尾二郎・山本孝二・小川絹代

昭和54年度に琵琶湖から200尾の親魚を移植し、三刀屋内水面分場で種苗生産試験を行ってきた結果、3年目の56年度は50万尾の稚魚を生産することができた。種苗量産に必要な親魚の確保にもある程度、メドもついたので親魚養成に必要なモロコを残し、約33万尾を試験放流した。

その概要は以下のとおりである。

1. 放流期日 1981年11月4日、11日、13日。
2. 放流場所 斐伊川口、十四間川、新建川口。  
図1のとおりである。
3. 放流数 33万尾 0才魚 30万尾（平均体長5.9cm、平均体重3.0g）  
1才魚 3万尾
4. 追跡調査 宍道湖漁業協同組合員のワカサギ網（刺網、樹網）により11月中に採捕され報告された数を図1に示した。

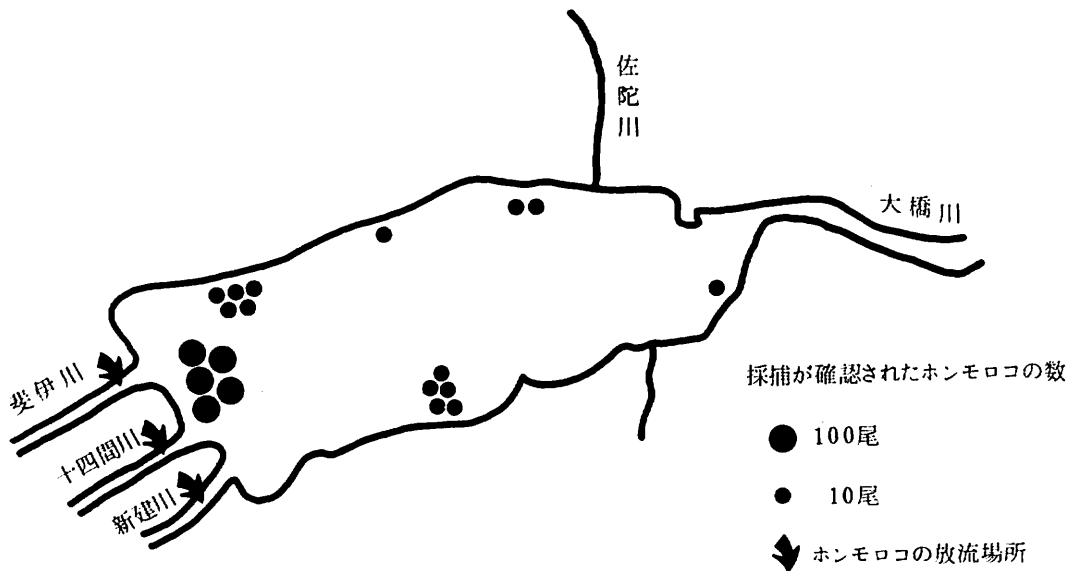


図1 ホンモロコの放流場所と採捕場所

淡水仕事業が当初の計画より遅れているため、県の要請もあり宍道湖が淡水仕する以前に放流することになった。したがって新しい漁業資源としてホンモロコを宍道湖で繁殖、定着させることを目的とした放流でなく、むしろ現在の塩分濃度（1000～2000 ppm）に対するホンモロコの耐性や越冬中の減耗などについて試験することを目的とした。

宍道湖の現在の塩分濃度を考えて放流場所を塩分濃度の低い斐伊川、新建川、十四間川の河口。（ $Cl^-$ 500ppm前後）を選定して放流した。河口に放流したモロコが塩分を避けて淡水域である、川の上流にのぼって行くことを予想したのであるが、モロコの再捕された場所をみると宍道湖の全域にわたっており、放流して3日目にはすでに嫁ヶ島附近の罾網で再捕されている。この様に放流されたモロコが塩分濃度の高い宍道湖東部まで移動するのは予想外であった。

また再捕数は放流した11月中は主として西部のワカサギ網に相当量採捕された模様であり、その後も12月20日頃までは各地のワカサギ網にワカサギと共にわずか1～2尾ずつであるが毎日採捕されていた。しかし12月20日以後はほとんど採捕されていない。したがって冬期に多くのモロコが死んだのか、或は水温が低下したため湖底において冬眠状態にあり、網にかからないのか判断ができなかった。

宍道湖で越冬できるのかどうかは大きな課題であるが4月になるとワカサギ漁が終り、モロコを採捕する手段を失ってしまって越冬中における減耗の状態を充分調べることができなかった。

放流後の追跡調査、効果調査を漁協組合員にまかせるのでなく、今後は試験場自身で採捕試験の方法を考えなければならない。